



災害ボランティアシンポジウム

# 能登半島地震被災地の復興における ボランティア活動について



報告者: 珠洲市社会福祉協議会 総務管理課 珠洲ささえ愛センター 主事 神徳 宏紀



## 社会福祉法人 珠洲市社会福祉協議会 総務管理課 珠洲ささえ愛センター 主事 神徳 宏紀

### ●その他の所属

- ・飯田町まちづくり協議会 防災/公営住宅/道路部会(副部会長)
- ・飯田町未来創造委員会 ・飯田町祭礼委員会(事務局)
- ・珠洲市消防団飯田分団 ・災害支援団体STRANDER
- ・合同会社 HUGKUMI(FELLOW)

能登半島の最先端、石川県珠洲市生まれ。  
金沢市の商社に勤務。社会人となり地元の祭礼などの地域行事に密接に関わる様になる。  
2017年に珠洲市に戻り、珠洲市社会福祉協議会に入職。  
社会福祉士等の資格取得の他、地元消防団等にも入団し、日頃から防災に関わることとなる。  
2022年の地震時に災害VC、2023年と2024年の地震、豪雨災害時は災害VCと珠洲ささえ愛センターにて住民の生活再建支援を担当。

## 発災前の珠洲市：美しい自然と進む高齢化

- 本州で一番人口が少なく、高齢化が進んだ市  
(高齢化率

53.27%

- 人口：約10,469人 / 世帯数：約5,216世帯
- 半島最先端という地理的条件 (行き止まりの地形)



## 短期間に何度も何度も被災してきた珠洲市 数年の間に震度5以上の地震は18回も観測されている。

日付	種類	災害名	震度	犠牲者	災害ボラセン運営状況
令和4年6月19日	地震	令和4年珠洲地震※仮称	震度6弱	-	6月20日～7月8日(19日間)
令和5年5月5日	地震	令和5年奥能登地震	震度6強	1名	5月6日～7月15日(71日間)
令和6年1月1日	地震	令和6年能登半島地震	震度7	684名	1月2日～現在(R7年末で730日間)
令和6年9月21日	水害	令和6年奥能登豪雨	-	20名	上記と同様に継続中

ここで「珠洲ささえ愛センター」を立ち上げる。

令和6年能登半島地震で珠洲市の交通/通信/インフラが全て遮断。1週間は公助は機能しなかった。  
【令和5年奥能登地震】を受けて令和5年10月には「珠洲ささえ愛センター」を立ち上げ、被災された方々の生活再建に向けた相談事業を展開。

## 珠洲市社協では災害VC(ボランティアセンター)を立ち上げた。

### 災害ボランティアセンターのうごき

日付	備考
R6.1月1日	16時10分 最大震度7の地震災害が発災 🔥
1月2日	災害VCの設置・各種NPO団体等が珠洲入り&活動開始
2月1日	ニーズ受付と現地調査開始
2月3日	一般ボランティアの活動開始(1日約20名~200名)
9月初旬	毎日ボランティア派遣を継続/10月より週末型へ移行計画
9月21日	令和6年奥能登豪雨が発災 💧 /急遽毎日型の活動を継続へ
R7.1月	一般ボランティアの活動を週末型に移行
R7.8月	災害VCの依頼締切り/以降も相談を受けて対応
R7.10月	災害ごみ仮置場が閉所/復興VCを設立し、災害VCと並行して活動

当初は奥能登へ向かう道路状況が悪かった事や、ボランティアを受け入れる環境(衛生や資源)の問題が整わず、技術系(専門ボラ)での活動を主として行った。

活動の縮小を目前とした令和6年9月21日、豪雨災害が発生し再度ボランティアの受入れを大幅に増やし、「地震」と「水害」の対応開始。

令和7年10月からは、災害VCと並行して再建に向けた復興VCを開設。

## ボランティアの活躍を数字で見る



人口約1万人の自治体で災害ボランティアニーズは約8,500件。危険な家屋が殆どで、技術系と言われるニーズが半数を占める。

いずれも社協だけでは対応が難しい状況。様々な団体にお力をお借りした。

当時は資源(ヒト/モノ/カネ)が限られていた中で、思うように支援ができない事もあった。

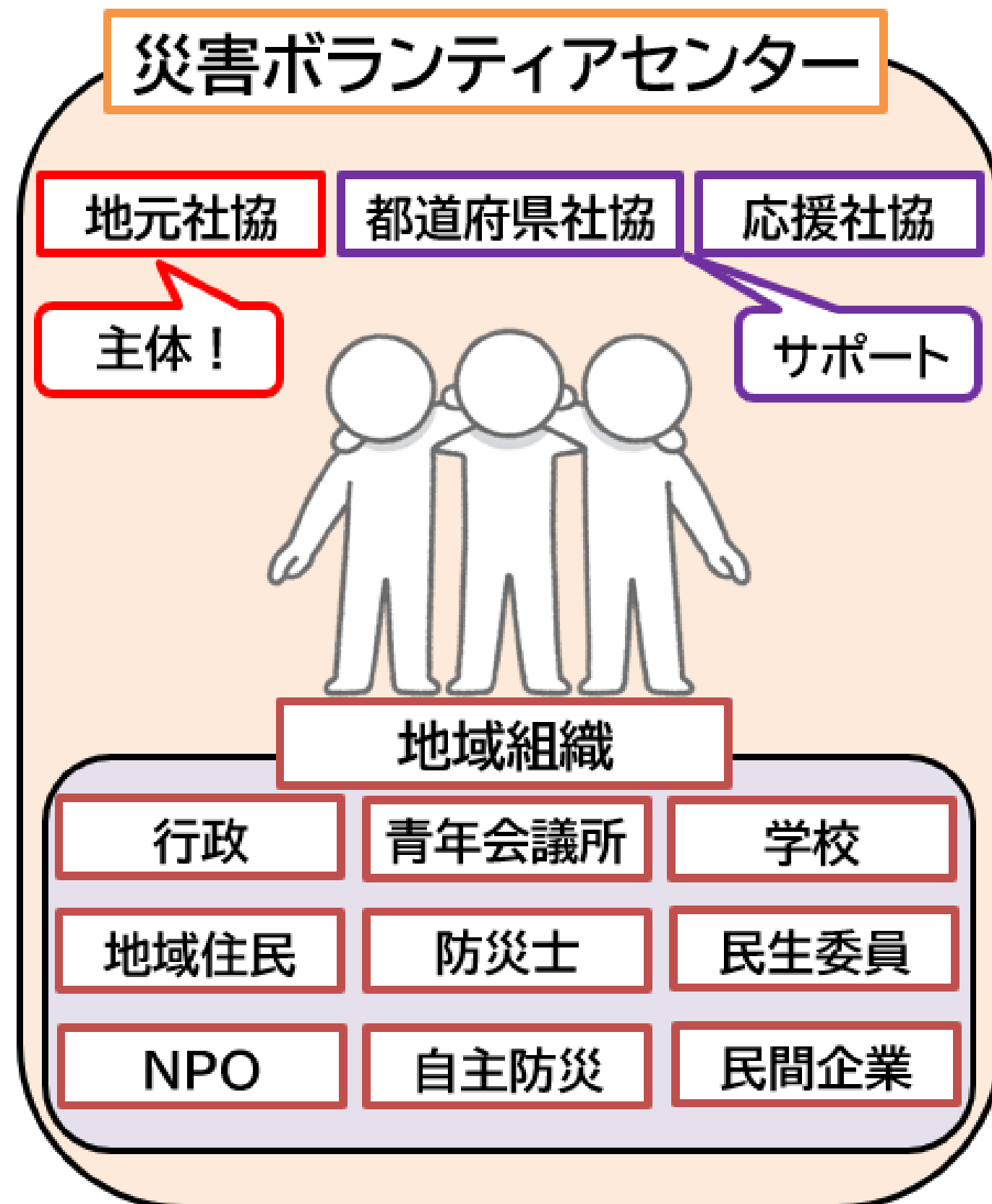
複合災害による避難生活も長期化したこともあり、住民のお困り事に対し、発災から2年を越えた現在も対応は継続中。

## 自分たちで美しい地域を取り戻す



住民・連携団体・学生ボランティア等が連携して津波の被害を受けた海岸の清掃を実施。水害によって土砂の溜まった道路など観光地としての美しい珠洲市を取り戻すため、市内各地で住民の方と協働して活動を展開。住民だけでは難しくても、ボランティアの力を借りて自分たちのふるさとを取り戻す。

## 地域協働型災害ボランティアセンターの必要性



近年の被災地では、被災した市区町村社協が主体となって災害ボランティアセンターを運営するケースが多い。

感染症の流行や南海トラフ地震・首都直下地震などの**広域的な巨大災害が発生した場合は地域外からの外部支援は難しい。**

地域組織の連携・協力により、支援の幅を大きく広げることができる他、**地域の顔の見える関係性により運営に大きなメリットが生まれる。**

※メリットの例

(安心感・土地勘・方言・風土理解・持続性)

## 区長さんの声



「 少しずつでも地域が前に進んでいるのが分かって嬉しい。  
色々な人に助けられて、今の地域が有る。  
心が折れそうになっても、大変でも前に向かって頑張るしかない。  
**当事者が諦めたら、支援者の苦労が報われない。これからも一緒に頑張りたい。 」**

## 地域で関わり続ける事の重要性



地震により倒れた電柱が接触して屋根が損傷、雨漏りや漏水が発生したお宅。電力会社では自然災害による賠償は行わない事や、行政としても介入が難しいとの事で人を信じる事ができなくなり、人との関わりが困難になられる。屋根の養生の提案をするも、雨漏りや漏水に耐え、清拭や水汲みで1年間過ごされる。平時からお付き合いのある民生委員さんにもご協力いただき、継続的に説得を試みた。年末に屋根の養生の決心をされ、1つずつ解決していくと明るく心を開いて頂けた。

## これからの災害ボランティアの役割



発災当時は公助の支援からこぼれる方を支えるための役割が大きかった。(セーフティーネットの役割)

現在の災害ボランティアの役割は、「代わりにやる」ことではなく「取り戻すプロセスに伴走すること」。

お客さんを作るのではなく、地域の参加者を増やしていく必要がある。

ボランティアは安易な労働力や無償の便利屋ではない。

手を放して自立できるところまで、責任をもって関わる必要がある。

そのためには、やり過ぎない支援のかたちも重要である。(ハンモックにしない)

まだまだ頑張ります!!  
ご清聴ありがとうございました。



←支援金のご協力をお願いいたします!!